

二〇二一年二月一日

人垣は試食コーナー街師走
月蝕の極みて現るる冬銀河
覚え無き万両庭のあちこちに
寒雷のあとうそのごと夜の静か
切り株の年輪しるき山時雨
クリスマスオブジェを巡る園愉し

二〇二一年二月九日

散り銀杏大師の肩に足元に
光る海見えゐて猪名のしぐれけり
をみならも昼酒少し納め句座
初雪や巫女がうち振る鈴の音
霊水を汲む北風にうずくまり
神の水掬ぶひしゃくに散紅葉

二〇二一年二月八日

冬風 of 海展けたる須磨明石
猫車錆びてころがる冬菜畑
寄せ鍋や明日は帰任の子を囲み
湯のたぎる音のみ聞こゆ夜なべかな
からたちの刺とぎすまし冬ざるる
雨晴れて朱の玉宿す実南天
神庭に焚く櫓の灰白きかな
いただきに錦残して山眠る
冬天へすつからかんや大銀杏

二〇二一年二月七日

鰯大漁とて朝競りの活気かな
ひとひらの葉の揺れ惑ふ冬木かな
スケッチも添へし句帳や紅葉狩

満天

はく子

ともえ

花茗荷

よし女

ひかり

三刀

うつぎ

雅流

花茗荷

よし女

とううち

わかば

わかば

菜々

ともえ

はく子

満天

宏虎

せいじ

とううち

花茗荷

せいじ

有香

二〇二一年二月六日

へりコプター師走の空を旋回す
健やかに生きて傘寿の師走かな

二〇二一年二月五日

水鳥の点々と散る池広し
と見る間に消ゆ山裾の冬の虹
同じ顔をりし連夜の年忘
お洒落など遠き日のこと着膨れて
初冬や葉擦れの音も乾びたる
観音の光背となる照紅葉
夕日いま終のほむらを枯山に

二〇二一年二月四日

十人で満員道の駅小春
電飾にがんじがらめや冬木立
水底に錦絵なせる散紅葉
余白なき暦のメモも十二月
吉良墓所のほとりに残る焚火跡
潮先の千鳥小舟のごと走る
日射すとき銀の綺羅々や浜千鳥
裸木に鈴なりとなる雀どち

うつぎ

三刀

こすもす

よし女

雅流

うつぎ

とううち

治男

はく子

菜々

満天

百合

満天

なつき

三刀

よし女

ぼんこ

毎日句会みのる選・二〇二一年二月一四日